

『秋田県総合郷土研究』における新民謡
—鹿角に着目して—

鈴木 慎一郎

On New Folk Song in *Akitakensougokyoudokenkyu*:
Focusing on Kazuno

SUZUKI Shinichiro

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第20巻 第3号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol. 20 / No. 3

令和6年3月27日発行 March 27, 2024

『秋田県総合郷土研究』における新民謡

-鹿角に着目して-

鈴木慎一郎*

On New Folk Song in *Akitakensougokyoudokenkyu*:
Focusing on Kazuno

SUZUKI Shinichiro*

キーワード：『秋田県総合郷土研究』、新民謡、鹿角、小田島樹人、《鹿角小唄》

Key Words: *Akitakensougokyoudokenkyu*, New Folk Song, Kazuno, Odajima Jujin, *Kazuno Kota*

はじめに

本稿の目的は、秋田県師範学校・秋田県女子師範学校によって、1939（昭和14）年に編纂された『秋田県総合郷土研究』における新民謡の位置付けを明らかにすることである。

文部省は1930（昭和5）年12月、各師範学校に郷土研究施設費を交付し、全国の師範学校において郷土教育が展開される。各師範学校は郷土室を整備し、生徒主体の学習が開始される¹。

1935（昭和10）年、文部省は再び郷土研究施設費を交付し、山梨県師範学校・山梨県女子師範学校に『山梨県総合郷土研究』の編纂を行うよう示唆する²。筆者は、『山梨県総合郷土研究』ならびに1937（昭和12）年に発行された、山梨県女子師範学校編『微細郷土研究：加納岩町に関する』における新民謡の位置付けを検討した。その結果、山梨県師範学校と山梨県女子師範学校の郷土教育において、大衆文化である新民謡を積極的に取り上げていた点を明らかにした³。

文部省は、山梨県に続き、1936（昭和11）年、秋田県、茨城県、香川県を指定して、各師範学校を中心とした『総合郷土研究』の編纂を企画する。では、これらの県においても、山梨県と同様に新民謡を積極的に取り上げていたのであろうか。本稿では、秋田県を事例とする。秋田県が指定された背景には、

郷土研究施設費交付以前から、郷土教育に積極的に取り組んでいたことと、文部省囑託であった小田内通敏（1875-1954）の出身県であったことが影響している。1930（昭和5）年7月には、県学務課から「郷土教育実施方案」が提示されていた。

秋田県師範学校では、1913（大正2）年に卒業し、《浜辺の歌》の作曲者である、成田為三（1893-1945）、1916（大正5）年に卒業し、音楽教科書の大家である、黒沢隆朝（1895-1987）⁴、1922（大正11）年に卒業し、和音感教育を実践した、佐藤吉五郎（1902-1991）⁵らの複数の音楽家・音楽教育者を輩出している⁶。

先行研究としては、外池智（2004）が挙げられる。

『秋田県総合郷土研究』の編纂の経緯ならびに秋田県女子師範学校における郷土教育の展開について明らかにされている⁷。当然のことながら、民謡や新民謡を対象とした研究ではないため、民謡や新民謡については言及されていない。

他方、板橋孝幸（2020）によって、秋田県における郷土教育運動の展開について考察されているものの、農村小学校との関係を論じた研究であるため、民謡については言及されていない⁸。

その他、佐川馨（2011）は、1930（昭和5）年に制定された《秋田県民歌》の背景として、郷土教育の隆盛に着目しているものの、ここでは新民謡については触れていない⁹。佐川（2014）は、秋田県出身

*鳥取大学地域学部地域学科人間形成コース

の新民謡の作曲者である小田島樹人(1885-1959)について明らかにする¹⁰。

研究方法としては第一に、秋田県師範学校・秋田県女子師範学校附属小学校の変遷を概観する。第二に、1932(昭和7)年に編纂された『郷土研究紀要』における民謡の位置付けを整理する。第三に、『秋田県総合郷土研究』の編纂の経緯を概観した後、『秋田県総合郷土研究』における民謡に着目し、新民謡の位置付けを明らかにする。特に小田島樹人の関係から鹿角市を主な対象とする。以上の作業を通して、秋田県師範学校・秋田県女子師範学校の郷土教育における新民謡の位置付けを解明する。

I. 秋田県師範学校・秋田県女子師範学校の附属小学校の変遷

1. 附属小学校の変遷

表1は、附属小学校の変遷を一覧にしたものである。秋田県師範学校附属小学校は、1909(明治42)年、秋田県女子師範学校附属小学校と改称される。男子師範学校の附属小学校がなくなったことに伴い、明德尋常高等小学校(現、秋田市立明德小学校)を代用附属小学校とする。1915(大正4)年、農村教

育の研究と指導のために、旭川尋常小学校(現、秋田市立旭川小学校)を第二附属小学校とし、児玉庄太郎が主事を務める。それに伴い、明德尋常高等小学校は第一附属小学校となる。1921(大正10)年9月、第一附属小学校の主事として、赤井米吉(1887-1974)が着任する。11月に「学芸会」を開催し、学校劇を導入するものの、強い批判を受け、1922(大正11)年4月に退職し、成城小学校へ再び転じる。1924(大正13)年、第一附属小学校訓導であった照井猪一郎(1887-1964)らと共に、「個性尊重」「自主自立」「自由平等」を教育理念とする明星学園を創設する。1930(昭和5)年、「郷土教育連盟」が結成され、赤井米吉は本部連盟員を務める。

1933(昭和8)年、秋田県師範学校附属小学校が設置され、第一附属小学校、第二附属小学校は解消され、外旭川尋常高等小学校(現、秋田市立外旭川小学校)を代用附属小学校とする。一方、秋田県女子師範学校においても農村教育に関する理解と体験のため、1936(昭和11)年、下北手尋常高等小学校(現、秋田市立下北手小学校)を代用附属小学校とする。

このように、秋田県師範学校、秋田県女子師範学校ともに、農村教育のために代用附属小学校が設置されているという特色がみられる。

表1 附属小学校の変遷

年	男子	女子
1874(明治7)	太平学校附属小学科	
1878(明治11)	秋田県師範学校附属小学校	
1880(明治13)		秋田女子師範学校附属小学校
1886(明治19)	秋田県尋常師範学校附属小学校	廃止
1898(明治31)	秋田県師範学校附属小学校	
1909(明治42)	改称 明德尋常高等小学校を代用附属小学校	秋田県女子師範学校附属小学校
1915(大正4)	旭川尋常小学校を第二附属小学校 明德尋常高等小学校は第一附属小学校	
1933(昭和8)	秋田県師範学校附属小学校 第一、第二附属小学校は解消 外旭川尋常高等小学校を代用附属小学校	
1936(昭和11)		下北手尋常高等小学校を代用附属小学校
1941(昭和16)	秋田県師範学校附属国民学校	秋田県女子師範学校附属国民学校
1943(昭和18)	秋田師範学校附属国民学校	秋田師範学校附属国民学校

出典 『創立百年史：秋田大学教育学部』1973年から作成。

II. 『郷土研究紀要』における民謡

1. 秋田県女子師範学校における郷土教育

秋田県女子師範学校における郷土教育は、1929(昭和4)年11月以降、本格的に実施され、1930(昭和

5)年の郷土研究施設費交付前に取り組まれている。

1930(昭和5)年、郷土研究室が整備される。1932(昭和7)年5月、秋田県教育会初等教育部主催の「郷土研究資料展覧会」が秋田県女子師範学校において開催される。同年11月には、郷土教育連盟秋田

県支部が発会し、副会長として学校長の沼田平治、常任幹事として秋田県女子師範学校附属小学校訓導の石井正太郎が関与する。同年12月には『郷土研究紀要』と『郷土研究地理書』が編纂される。

『郷土研究紀要』の「序」において、研究調査の過程を下記の四期に捉える¹¹。

第一期には研究調査の項目を作製し、第二期には本校在来の研究物標本に系統づけ、第三期には項目と在来の標本、研究物とを対照して、大略の体系をつけ、更に郷土研究室を特設し、第四期には郷土の重要事項と職員生徒の各趣味に従って研究調査せしめ、職員には毎月輪番に学科担任よりの研究発表をなさしめつつあるのがむ現状である。

表2は、『郷土研究紀要』目録である。教科ごとに展開され、音楽科では「秋田県に於ける民謡俚謡に就いて」取り組まれている。民謡への着目が文学の領域から始まったこともあり¹²、師範学校の郷土教育の民謡の調査も、国語漢文の教諭によって実践されることがあった。そのような中、秋田県女子師範学校では、音楽の教諭によって実践されていることは特筆すべき点である。

秋田県女子師範学校の音楽の教諭は、1929（昭和4）年、沢木（丸山）弥生が着任する¹³。秋田県出身の沢木は1927（昭和2）年、東京音楽学校甲種師範科を卒業した¹⁴。1932（昭和7）年には、久野ヤスコが着任する¹⁵。1934（昭和9）年、1935（昭和10）年には、水口（折茂）ますみが在職する¹⁶。富山県出身の水口は1929（昭和4）年、東京音楽学校甲種師範科を卒業した¹⁷。

表2 『郷土研究紀要』目録

p.	教科	見出し
1 3 7 12	第一，修身公民科	一，佐竹藩時代の刑罰 二，秋田県に於ける陪審制度実施の状況 三，秋田及びその所轄刑務所の沿革 四，郷土に於ける公益質屋の状況
17	第二，国漢科	一，本校を中心とする近郊遠足案内
65 75	第三，理化科	一，雄物川と水害について 二，秋田県に於ける電気事業表
77	第四，博物科	一，郷土博物の一瞥
131 135	第五，図画手工科	一，秋田県に於ける洋画の発達 二，手工芸品に就いて
143	第六，音楽科	一，秋田県に於ける民謡俚謡に就いて
167 173	第七，裁縫科	一，モツペ及タナの県内分布状態 二，農村被服の裁縫
189 217 223	第八，家事科	一，郷土に於ける食品研究の一端 二，郷土に於ける住宅の考察 三，秋田県の学校給食の現状について

出典 『郷土研究紀要』秋田県女子師範学校，1932年から作成。

2. 『郷土研究紀要』における民謡

「序」では以下の通り、始まる。

秋田県の民謡を一瞥して驚いた事は、非常に其数の豊富な事である。私共の調べた範囲丈でも約二〇種近い数が挙げられるが、勿論隠れたる民謡も相当ある事と思ふ。其等をも合せば実に本県は他県に比して豊富な地方と云へよう。抑々民謡は人類の発生と共に生れたものと推察

する。吾が秋田の民謡も吾が秋田歴史の発生と共に生れ、それが特有の地勢、気候、民俗等の影響を受けて所謂郷土民謡としての発達を来したものと思ふ。故に先づ第一、郷土の歴史を充分調査研究し、後初めて此の民謡が真に理解されるものと信ずる。

前述の如く秋田の民謡は非常に多い。之は秋田の民族が各種民族の集団であるといふ事に起因するものと思ふ。即ち秋田民族は古くはアイヌ

系の民族, 東夷の子孫が土着の民として発達し, 下つて徳川の初期, 彼の酒田港が西廻要路となつてからは日本海沿岸の民族, 遠くは朝鮮地方の民族の移住, 又佐竹氏遷封と共に, 太平洋沿岸の民族移住も行はれ, そして之等民族と共に各種の民謡が移入され, 更にそれが秋田の地勢産物気候風土習慣に影響されて今日の民謡を来したものと推察する。

表3は、『郷土研究紀要』における民謡を一覧にしたものである。秋田県民謡17曲が掲載され, 新民謡は所収されていない。楽譜はなく, 起源と歌詞について解説されている。

参考資料として、『秋田県案内』が挙げられる。『秋田県案内』は, 1930(昭和5)年2月に秋田郷土会から発行され, 1931(昭和6)年5月に再版発行される。「民謡と舞踊」の項目もある。表3の備考に「○」を付けた民謡は、『秋田県案内』にも掲載されているものである。「○」は13曲あり, 全17曲の76.5%が『秋田県案内』と同一である。

以上, 繰り返しとなるが, 1932(昭和7)年発行の秋田県女子師範学校の『郷土研究紀要』には, 伝統的な秋田県民謡は17曲所収されている一方, 新民謡は所収されていない。

表3 秋田県民謡

	地方	民謡	備考
一	仙北地方	おぼこ節	○
		荷方節	○
		ひでこ節	○
		姉こもさ	○
		かまやせ節	○
		獅子舞	○
		白挽唄	○
		飾山囃	○

二	秋田市及附近	秋田音頭 田植唄 船頭唄 きよ節	○ ○
三	北秋地方	獅子踊	○
四	由利地方	おえとこ節 本荘(庄)追分	○
五	平鹿地方	岡本新内	○
六	男鹿地方	俚謡一種	

Ⅲ. 『秋田県総合郷土研究』の概観

1. 秋田県師範学校における郷土教育

秋田県師範学校では, 1933(昭和8)年, 『郷土教育 農業研究資料』ならびに『創立六十周年記念 秋田県郷土誌』が発行される。民謡に関する記述はない。

代用附属小学校であった外旭川尋常高等小学校の所在地であった外旭川村(現, 秋田市)を研究対象とし, 実態調査を行い, 郷土教育実施案の作成を試みていた。しかしながら, 『秋田県総合郷土研究』の編纂のために, 一時, 中止となった。

野外調査として, 最高学年の生徒が男鹿半島において一泊二日の調査を行っていた。

郷土室に関しては, 研究部と教育部と博物館の総合的経営を図ろうとしていた¹⁸。

2. 『秋田県総合郷土研究』編纂の経緯

表4は, 『秋田県総合郷土研究』編纂の経緯を一覧にしたものである。

1937(昭和12)年1月, 小田内通敏を招き, 着手され, 1938(昭和13)年10月に原稿完成, 発送され, 1939(昭和14)年4月に印刷, 発行される。

表4 『秋田県総合郷土研究』編纂の経緯

年	月/日	
1937(昭和12)	1/23	小田内通敏を招き, 会合。午前:県庁, 午後:女子師範講堂
	1/24	研究項目作成委員会:女子師範
	2/11	文部省との打合せ:東京
	3/4	研究調査方法に関する諸方針について協議:男子師範
	3/14	研究調査方法に関する諸方針について協議:男子師範
	3/29-30	郷土研究座談会:女子師範講堂
	4/7-14	各部門別々に研究会
	4/22	調査項目全般にわたって最終的修正:男子師範
	5/7	小田内を招き, 会合:女子師範
	5/28-6/2	小田内を中心に, 調査項目の細部にわたり検討

1938(昭和 13)	6/3	小田内を中心に、研究調査上の協議:県学務課
	6/8	調査票について検討:県学務課、男子師範
	6/19	各調査票の印刷完了
	6/21	総合郷土調査委員会:女子師範講堂
	6/25-7/7	総合郷土調査打合せ:各学区
	7月中旬	両師範の生徒を対象とした調査票の作成、交付、指導
	10/8-12	各部門別に小田内の指導
	10/12	小田内と会合:男子師範
	11/27	各自の分担について研究発表:男子師範
	11/29	各自の分担について研究発表:女子師範
	11/30	各自の分担について研究発表:男子師範
	1/17-18	教職員への小田内の指導:女子師範
	1/19-21	教職員への小田内の指導:男子師範
	4/25	予算構成の打合せ、編集委員の選任
	5/31-6/14	執筆者への小田内の指導
	6/7-22	各部門への小田内の指導
	8/22	原稿整備に関する協議
	8/24	各部主任打合せ
	8/24	各部主任打合せ
	8/25-9/9	各部主任原稿図表検閲
	9/10	各部主任会議
	9/12	各部会
	9/16-22	各執筆者原稿並びに図表訂正
9/23	事務主任へ原稿及び図表提出	
9/24	編集委員責任箇所検閲	
10/5-9	執筆者原稿図表再訂正	
10/10-20	編集委員全体通覧	
10/21	研究主任(両校長)原稿並びに図表検閲	
10/31	原稿完成、発送	
1939(昭和 14)	4/10	印刷
	4/15	発行

出典 『秋田県総合郷土研究』1939年、pp.1201-1208 から作成。

IV. 『秋田県総合郷土研究』における民謡

1. 『秋田県総合郷土研究』における民謡

発行された『秋田県総合郷土研究』の目次は以下の通りである。

生活基底としての自然的環境
歴史的発達
人口
聚落
交通
行政
経済
社会
文化
教育
結論

『秋田県総合郷土研究』において「民謡」は「文化」の大項目の中に掲載される。「文化」は以下の中項目によって構成される。

- 一 神社及び宗教
- 二 文化的記念物
- 三 民俗
- 四 郷土芸術
- 五 文化施設
- 六 文芸
- 七 秋田に於ける二大人

「四 郷土芸術」は、以下の通り、構成される。

緒言
舞踊
民謡
結言

(附) 手工芸品

「緒言」では以下の通り、始まる¹⁹。

雪の国出羽路は芸術の国として現代に誇るべき点が甚だ多い。目をこの郷土芸術に向けるならば、そこには驚くべき豊富な産物が、百花繚乱と咲いてゐる。現存する舞踊や、歌謡は長年月の間に精選された祖先の尊い遺産となつて現代の郷土人の生活に織り込まれ、然も凡てが西洋文化などの一指も触る事なく、生粋の名作となつて完全に受け継がれてゐる。郷土芸術は、民俗や、信仰や、風習に密接不離な関係又は深い因縁のあるは論を俟たない。其の種類の数多い点と其の芸術の素朴にして雄渾、優婉にして典雅なる点を見れば、連綿として伝はるところの祖先の芸術生活の断面をうかがふことが出来、詩の国秋田を誇る所以亦故あるかなである。

「民謡」は、961 から 965 ページにかけて、「伝統的民謡の代表的なもの」、「童謡」、「移入民謡」、「その他の民謡と新作のもの」、「新作民謡」の順で構成される。執筆は、小野崎晋三 (1903-1969) によってなされる。小野崎晋三は、1922 (大正 11) 年、秋田県師範学校本科第一部を卒業後、小学校訓導を経た後、1924 (大正 13) 年、東京音楽学校へ進学。1927 (昭和 2) 年 3 月、東京音楽学校甲種師範科を卒業後、岩手県師範学校へ着任する。1930 (昭和 5) 年、秋田県立本荘高等女学校 (現、秋田県立由利高等学校) へ異動した後、1931 (昭和 6) 年、秋田県師範学校へ着任する²⁰。

なお、小野崎の前任者は、降幡實義であった²¹。1928 (昭和 3) 年から 1930 (昭和 5) 年にかけては、伊藤順造であった²²。東京出身の伊藤は 1924 (大正 13) 年、東京音楽学校甲種師範科を卒業した²³。

ちなみに、1939 (昭和 14) 年の秋田県女子師範学校の音楽の教諭は、末武義雄であった。北海道出身の末武は 1929 (昭和 4) 年、東京音楽学校甲種師範科を卒業し²⁴、1930 (昭和 5) 年、北海道函館師範学校へ着任した²⁵。1930 (昭和 5) 年、共益商社書店か

ら発行された『音楽教育の真使命』の著書がある。『秋田県総合郷土研究』では、「五 文化施設」の中の「ラジオ」(pp. 984-986) と「新聞・雑誌」(pp. 986-992) を執筆している。

小野崎は「参考文献」として以下を列記される²⁶。

秋田県図書館協会	秋田郷土叢話
小玉久蔵	秋田郷土芸術
秋田魁新報社	秋田魁新報
昭和新聞社	昭和新聞
四十八校	調査票

「伝統的民謡の代表的なもの」については、以下の 4 曲が紹介される²⁷。曲名は付けられており、歌詞や由来について解説されている。《おぼこ節》については楽譜も掲載されている。《秋田萬歳》以外の 3 曲は、秋田県女子師範学校の『郷土研究紀要』にも所収されていた。

おぼこ節
秋田音頭
岡本新内
秋田萬歳 (秋田市近郷及び仙北郡在)

2. 『秋田県総合郷土研究』における「移入民謡」

「移入民謡」では、次のように説明される²⁸。ここから鹿角郡には新潟県の《越後節》、宮城県塩釜市の《鹽竈節》が移入されていたことが読み取れる。

移入民謡はその数誠に少い。仙北地方に、おいとこ節・おけさ節・よしこの・どつちり、由利郡にもおいとこ、鹿角郡に越後節・鹽竈節、県内一般に松前及び江差追分のある程度であり、いつの頃の移入かは不明である。何れも今では地方色を帯び、郷土の謡と変つてゐる。

「その他の民謡と新作のもの」については、表 5 に整理する。鹿角郡には、26 曲の民謡が列記される。前述の《越後節》、《鹽竈節》も含められている。後述する《湯瀬村こ》も記されている。

表 5 その他の民謡と新作のもの

地域	民謡
鹿角郡	七助節, 太郎助節, 春唄, 秋唄, 湯瀬村こ, 小豆澤村こ, たかすき, 松坂くづし, にいがた節, 柚子唄, 田搔唄, そでこ節, 臼挽唄, 山唄, 草刈唄, 長持唄, さんさ節, 越後節, 鹽竈節, 銀違ひ, よしこの節, おいとこ節, 検校節, 地ならし木やり唄, 山こ節, 花輪囃子

北秋田郡	草刈唄・白挽歌，山唄，かけ唄，東五郎の唄，阿仁道中双六，秋田音頭
山本郡	田植唄，田草取唄，白挽歌，米搗唄，馬方節，酒屋米とぎ唄，土方唄，水汲みの唄，権七の唄，おぼこ節，八郎湖くどき，棧敷ばやし
南秋田郡	戦き謡，仁王舞の唄，曼多羅唄，田植歌，田草取唄，稲刈り唄，白挽唄，米搗唄，馬引唄，荷方節，三吉節，土搗唄，船川節
秋田市	秋田音頭，よしやれ節，サノサ節（替歌），ラツパ節
河邊郡	田植唄，秋田追分
由利郡	本荘追分，白挽歌，大正寺節，大漁節，土搗唄，豊年の唄，田植唄，草刈節，長持唄
仙北郡	飾山囃子，おめでたい節，土搗唄，木挽舞，藁砧節，飴売節，馬方節，生保内節，長持唄，お山こぶし，かまやせ節，仙北音頭，組音頭，おけさ節，なよ節，姉こ節，白挽唄，梵天唄，きよ節，ひでこ節，姉こもさ，荷方節，田植ゑ節，筏ぶし
平鹿郡	梵天唄，八澤木節
雄勝郡	祝唄，恵比須俵唄，餅つき唄，酒屋唄，川連ぶし

出典 秋田県師範学校・秋田県女子師範学校編『秋田県総合郷土研究』1939年，p.965 から作成。

3. 『秋田県総合郷土研究』における「新作民謡」

「新作民謡」は、『秋田郷土芸術』に基づき，記載されている。『秋田郷土芸術』は，1934（昭和9）年4月，秋田県社会教育課内の秋田郷土芸術協会から発行されている。秋田郷土芸術協会長の相野田瀬平は序において次のように述べる²⁹。

本会は郷土芸術の保存と純化を標榜して生れ，本来の指名へと其の歩を進めて居る。遇々本県に於ても見るところがあつて，斯道研究者として命名ある小玉久蔵氏に，之が調査を委嘱し，県下の各地に於ける其の概況を明にすることが出来た。

小玉久蔵は「調査を終りて」として1933（昭和8）年12月20日付で『秋田郷土芸術』の最後に次のように記す³⁰。

本年九月，本県郷土娯楽状況調査の命を拝し，爾来今日まで約一百日，専心その材料の蒐集整理考証等に没頭し，萬全を期したが，浅学菲才，つひに斯の貧弱な結果を見たに過ぎぬことを深く慚愧し，且つ感荷にそむく罪の大なるを痛感する。（中略）

今ここに蒐集した処のものは，県が曩に県内小学校長に委嘱して調査した郷土娯楽の資料を基礎とし，これに今回更に某々数十箇所を照会して得た若干の資料と，貧弱な手許の研究を織込んだ迄で，材料蒐集上に恵まれなかつたため，

或は脱逸があり，或は内容に甚しき精粗の差があつて，甚だ遺憾の次第である。

『秋田郷土芸術』の目次は下記の通り。

- 第一章 県下娯楽概況
- 第二章 郷土娯楽
- 第三章 新作歌謡

秋田県の伝統的な民謡は「第二章 郷土娯楽」の中で取り上げられる。秋田県の新民謡は「第三章 新作歌謡」の中で紹介され，以下の文章で始まる³¹。

最近，新作小唄の流行は，本県内にも可なり多くの歌謡を産んだ。皆これらは一様に，土地をうたつたものであるが，郷土に対する目ざめはいろいろの意味において面白い事とおもふ。故に現在の参考に，また将来においての調査資料にと存じ，これを採録した。

このように新民謡を肯定的にとらえ，参考資料として採録されている。上記に続き，郡ごとに全50曲の新民謡の歌詞が紹介される。楽譜はない。

表6は，筆者により整理した，『秋田県総合郷土研究』における「新作民謡」である。50曲の「新作民謡」の曲名が掲載され，全50曲が『秋田郷土芸術』と共通している。

表6 『秋田県総合郷土研究』における「新作民謡」

	地域	曲名	年	作詞	作曲	振付	レコード
1	雄勝郡	<u>湯澤小唄</u>		帯屋久太郎			
2	平鹿郡	<u>横手小唄</u>		石川誠	鈴木民五郎		
3		<u>新横手小唄</u>					
4		<u>横手情調小唄</u>		大山順造	鈴木民五郎		
5	仙北郡	<u>大曲小唄</u>	1931(昭和6)	田口松圃	小田島樹人	花柳珠實	コ 1933
6		<u>大曲花火音頭</u>	1933(昭和8)	栗林久司	黒澤隆朝		
7		<u>花館小唄</u>		石川哲五郎			
8		<u>角館小唄</u>		遠藤桂風	吉田勇		
9		<u>田澤湖小唄</u>					
10		<u>金澤舊蹟の唄</u>		小玉暁村			
11		<u>六郷小唄</u>					
12	由利郡	<u>由利小唄</u>		小島彼誰	小松平五郎		
13		<u>本荘小唄</u>	1930(昭和5) 前	若松太平洞 小島彼誰	小田島樹人		
14		<u>城は二萬石</u>		小島彼誰			
15		<u>小友小唄</u>					
16		<u>岩谷小唄</u>					
17		<u>石澤小唄</u>					
18		<u>石澤追分</u>					
19		<u>矢島小唄</u>					
20		<u>矢島民謡</u>					
21		<u>平澤小唄</u>					
22		<u>黒湯小唄</u>		三浦残鶯			
23		<u>亀田小唄</u>					
24		<u>下濱小唄</u>		徳照哲郎	森本佐		
25	河邊郡	<u>新屋小唄</u>		深味吟南	犬島郁太郎		
26	南秋田郡	<u>みなと小唄</u>		西条八十	中山晋平		ビ 1931
27		<u>酒の港小唄</u>		花岡青陽	中山晋平		
28		<u>湖畔小唄</u>		小島彼誰	藤井吉次郎		
29		<u>新船川ぶし</u>					
30		<u>湊音頭</u>					
31	山本郡	<u>能代音頭</u>		野口雨情	中山晋平		
32		<u>八盛の唄</u>					
33		<u>八盛行進曲</u>					
34		<u>森岳小唄</u>					
35		<u>能代小唄</u>		能代芸妓見 番	古賀政男	花柳徳三郎	
36	北秋田郡	<u>阿仁小唄</u>					
37		<u>新大館小唄</u>		三村雄吉	大村能章		
38	鹿角郡	<u>鹿角小唄</u>	1931(昭和6)	川村薫	小田島樹人		コ 1932
39		<u>花輪小唄</u>	1931(昭和6)	高杉露星	小田島樹人		
40		<u>綿木小唄</u>		曲田慶吉			
41		<u>綿木塚小唄</u>		曲田慶吉			
42		<u>花輪小唄</u>		佐藤秀雄			
43	秋田市及	<u>秋田県民謡</u>		佐藤健一			

44	び県	<u>秋田小唄</u>		小島彼誰	大島郁太郎		
45		<u>酒の秋田</u>	1931(昭和6)	小島彼誰	中山晋平		
46		<u>秋田自慢</u>	1931(昭和6)	花岡青陽	中山晋平		
47		<u>川端小唄</u>					
48		<u>名所秋田四季</u>		安藤和風	手塚松柳		
49		<u>新秋田音頭</u>		佐藤惣之助	佐々木紅華		
50		<u>ハタハタ音頭</u>		金子洋文	小松平五郎	石井漢	

注 下線：『秋田郷土芸術』に掲載。

(1) 《湯瀬小唄》

50曲の新民謡が掲載され、野口雨情作詞は《能代音頭》であり、中山晋平により作曲される³²。中山晋平作曲は、《みなと小唄》、《酒の港小唄》、《酒の秋田》、《秋田自慢》がある。

『秋田県総合郷土研究』には掲載されていない中山晋平作曲の秋田県の新民謡として、《湯瀬小唄》、《能代お杉音頭》がある³³。

《湯瀬小唄》は、湯瀬温泉の宣伝歌として、十和田タイムズ社の公募した歌詞で、山崎忠郎(1913?-1983)が作詞し、1932(昭和7)年に発表される。発売年は不明だが、キングからSPレコード(N-40)が発売され、松家奴が唄う。歌詞は以下の通り³⁴。

一
 ハここはみちのく木萱の中に
 唄でマタ伝はるウ 湯瀬村コ ヤッコラサ
 ※
 ソンレヨイヨイよいとこ
 湯瀬はマタ温泉どころよいところ
 ヤンレナットコ ヨイサッサ
 二
 ハ天狗橋から獅子刈見れば
 深山マタ桜がア ちらほらと ヤッコラサ
 ※
 三
 ハ粋な浴衣に河鹿を鳴かせ
 二人マタ並んだア 観瀑橋 ヤッコラサ
 ※
 四
 ハ燃ゆる思ひを紅葉に染めて
 岩をマタたよりのオ 姫小松 ヤッコラサ
 ※
 五
 ハスキー飛ばそか炬燵で飲もか
 高いマタ五ノ宮ア 雪嵐 ヤッコラサ

※

六

八十和田乙女と八幡平の
 相をマタ取り持つウ 湯瀬村コ ヤッコラサ

※

七

ハ茂る木萱に湯の花咲いた
 咲いてマタ揃ふて主を待つ ヤッコラサ

※

《能代お杉音頭》は、時雨音羽作詞で、1934(昭和9)年に発表され、同年、ビクターからSPレコード(53151)が発売され、勝太郎と三島一声が唄う。

湯瀬温泉に関しては、『秋田県総合郷土研究』の「社会」の「四 娯楽」の「都市的娯楽の発達過程」において「湯治より遊興地化せんとする温泉」として以下の通り、湯瀬温泉が取り上げられている³⁵。執筆者は、小野崎晋三である。

本県鹿角郡湯瀬温泉は青森県・岩手県等にも近く、随つて浴客吸収圏も面白味あるを以て次に同温泉に就き多方面より観察してみよう。

優れた景色と、近代的設備の浴槽を誇る湯瀬温泉も、鉄道の開通される数年前迄は、僅かに農閑期に於ける農村婦女子を唯一の対象とする小さな田舎の温泉場に過ぎなかつた。そして次の様な美しいメロデーが土地の人の喉から流れ出た。

○湯瀬村ココでアーヨ、行けば木の中萱の中

○朝日アさすさすでアーヨ、前は白川湯も御座る

花輪線の湯瀬駅(1995年「湯瀬温泉駅」と改称)が開業したのが、1931(昭和6)年であり、鉄道の開通に伴い、湯瀬温泉が観光地として発展する。『鹿角市史』においても「関旅館は、湯瀬ホテルに名称

を改め、大建造物で面目を一新して一躍湯瀬温泉の名をとどろかせた。花輪方面からも湯瀬に出店する者が多くなり、温泉街を形成していった」と鉄道開通による影響を記載している³⁶。五代目の関直右衛門(1873-1943)は、1932(昭和7)年、湯瀬ホテル第一期工事を起こし、木造二階建てを竣工し、9月に開業する。翌年には、第二期工事を竣工する。1935(昭和10)年には第三期工事として、別館も落成する³⁷。

湯瀬ホテルの全国にPRするために、1934(昭和9)年7月、東京朝日新聞社の秋田・青森・岩手三県の販売店大会を湯瀬ホテルに誘致した。ここには朝日新聞の営業局長であった(後の運輸大臣)、石井光次郎(1889-1981)や監査役であった、杉村楚人冠(1872-1945)らも出席した。杉村は八幡平に登山の途中落馬し骨折したため、1週間、湯瀬ホテルで療養した。また、1935(昭和10)年2月、湯瀬ホテルに湯治療養を訪れる。その際、《湯瀬の松風》を作詞し、帰社後に歌人の土岐善磨(1885-1980)に見せたところ、四代目の哥沢芝松(1892-1981)に曲付けを依頼し、レコードが誕生する。歌詞は以下の通り³⁸。

湯瀬の名に負う 瀬々の湯の
米代川に 立つ煙り
熱い思いは ななかまど
とぎして胸に ひめ小松
さあらぬ逢瀬 幾かさ松の
いつしかそれと 通へ松風

1935(昭和10)年5月、藤蔭静江(1880-1966)を招き、湯瀬ホテルにて《湯瀬の松風》と《湯瀬小唄》の振り付けが行われる。1936(昭和11)年2月、十和田湖が国立公園に指定され、7月、祝賀会が休屋で行われる。その際には、《鹿角小唄》、《湯瀬小唄》等も踊られる³⁹。

先述の『秋田県総合郷土研究』から引用した「湯瀬村ココで」始まる歌詞は、秋田県民謡の《湯瀬村コ》である⁴⁰。1937(昭和12)年、関直右衛門の尽力により、《湯瀬村コ》が初めて全国放送される⁴¹。『秋田郷土芸術』には、下記の解説と歌詞が掲載される⁴²。

宮川村湯瀬邊に謡はれる唄で春秋共に謡はれる。

湯瀬村こヤエ、湯瀬村こ 行けば木の中 萱の中
萱の中ヤエ 萱の中 前はしら河 湯もござる
湯もござるヤ 湯もござる

高い山から 朝日さす
朝日さすヤ 朝日さす
上や下から 傳馬こ来る
傳馬こ来るヤ 傳馬こ来る
傳馬こかついで 錢こ取る
錢こ取るヤ 錢こ取る
永く住みたい 湯瀬村こ

『秋田県総合郷土研究』では続いて下記の通り、記される⁴³。

此の湯瀬温泉が何時頃の発見かは分明しない。伝説では遠い昔のものらしい。徳川時代に入ってから菅江真澄翁が天明五年八月この東北の辺鄙な温泉に泊つた記録のあるのは面白い。翁の鹿角紀行に「宿近き川の波音、虫の声に河鹿の鳴く音をきき、望郷の感切なるものあり。涙落つ」として「ふるさとおもひ出湯の山近く わきて物うきさを鹿の声」この情趣は二百数十年後の今日尚味ふことの出来る雰囲気で「前は白川湯もござる」の小唄の詞が生き生きと光つてゐる。

菅江真澄(1754?-1829)は、三河国(現在、愛知県)に生まれ、国学、漢学、本草学を学ぶ。1783(天明3)年に北の旅に出掛け、記録に残す。久保田藩(秋田藩)の滞在が長く、秋田市に墓碑がある。

上記では、菅江真澄は、1785(天明5)年8月に湯瀬温泉に宿泊したと記される。『けふのせばのの』によると、菅江真澄は8月27日、青森県から戻る際、鹿角市の錦木塚を訪ねて伝説を聞き記した後、花輪を過ぎて大里に至っている。9月2日、大里を出発、小豆沢を通り、湯瀬に宿る⁴⁴。

1924(大正13)年3月、花輪尋常高等小学校(現、鹿角市立花輪小学校)にグランドピアノが設置される。4月、未踏路社、草の実詩社、愛友団の共催で、「カント生誕記念講演・音楽会」が開催される⁴⁵。その後、弘田龍太郎(1892-1952)、中山晋平、成田為三らが来演した⁴⁶。

1935(昭和10)年4月には、花輪劇場において、ソプラノ歌手佐藤千夜子(1897-1968)独唱会が行われる⁴⁷。

(2)小田島樹人

秋田県の新作民謡の特徴として、秋田県出身の作曲家である、小田島樹人や黒沢隆朝の作品が含まれ

ている点である。小田島樹人は、1885（明治18）年秋田県鹿角市花輪に生まれ、1904（明治37）年、岩手県立盛岡中学校（現、岩手県立盛岡第一高等学校）を卒業し、第七高等学校造士館理科（現、鹿児島大学）に入学するものの、翌年、中退。1908（明治41）年、東京音楽学校予科に入学し、1914（大正3）年、東京音楽学校本科器楽部（ピアノ）を卒業する。東京芝区三光小学校（2015年港区立三光小学校し閉校し、現、白金の丘学園白金の丘小学校・白金の丘中学校）教員となり、1919（大正8）年、辞職。1936（昭和11）年、秋田県立花輪高等女学校（現、秋田県立花輪高等学校）教員となり、1940（昭和15）年、秋田県立秋田中学校（現、秋田県立秋田高等学校）へ転任する⁴⁸。

佐川馨は小田島樹人の生涯区分を以下の三期に分ける。「第一期：1885（明治18）年～1914（大正3）年、生い立ち、東京音楽学校入学から卒業まで」、「第二期：1915（大正4）年～1935（昭和10）年、海野厚（1896-1925）との出会い、童謡創作と唱歌教材集の出版」、「第三期：1936（昭和11）年～1959（昭和34）年、郷里秋田における教育実践」⁴⁹。

1930（昭和5）年前頃に《本荘小唄》、1931（昭和6）年に《大曲小唄》、《花輪小唄》が作曲されていることから、第二期に新民謡を作曲したことになる。秋田県立花輪高等女学校教員になる前で、三菱金属鉱業研究所図書係を退職し、都新聞編集局に入り、俳壇選者を東京で務めた時期でもある。

《大曲小唄》は、1931（昭和6）年5月、大曲市掬水館での全県芸妓連合大会で発表される。1933（昭和8）年7月、コロムビアから渡辺光子が唄うSPレコード（2742B）が発売される。作詞者で、大曲図書館長であった、田口松圃（謙蔵、1883-1956）は次のように回想する⁵⁰。

小田島樹人先生がまだ都新聞に居られた頃、私の作詞の大曲小唄の作曲を、同じ社に居た若松太平洞さん（注・本名謙次郎。秋田県出身。明治15～昭和26）を通しておねがいをした。

その頃は全国的に小唄新作が流行した時代であったが、何ととっても西条八十作詞、中山晋平作曲というのが天下を風靡する概があった。

で大曲小唄を私に依頼した大曲の花柳界では、作詞作曲それから振付も秋田人にしてくれという注文で、私はその頃県人の作曲家につき合がなかったもので、都新聞にいる、魁時代からの親友の、若松君にお頼みした。

すると若松君からは、「それは丁度この社に小田

島樹人氏がいるから、おたのみしてみよう」という事になり、小田島先生の御快諾を得たというしだいである。

このように秋田人にしてほしいということから、小田島樹人に依頼されている。

1931（昭和6）年10月には、《鹿角小唄》が発表される。これは花輪線開通記念として花輪劇場で披露される。1932（昭和7）年10月、コロムビアから新橋喜代三（1903-1963）が唄うSPレコード（27109B）が発売される。川村薫によって作詞され、歌詞は以下の通り⁵¹。「錦木塚」、「大湯温泉郷」、「十和田湖」といった観光名所や民謡の《湯瀬村コ》も歌詞として使用されている。

一
 青い垣山 かづのの里は
 昔二万石 米の国
 深い思ひを けむりにはげば
 北も南も 黄金花
 ヨイトサッサ ヨイヨイ
 ヨイトサッサ ヨイヨイ
 ニ
 こめた真心 昔のままを
 ほこる紫 茜ぞめ
 若い心を 彩る恋は
 狭布も変わらぬ 錦木塚
 三
 鹿角乙女の 化粧の水は
 といだお米の 白い川
 灯かげ涼しく 君待つ夜半の
 りんごまるめろ 肌のよさ
 四
 ここは湯の里 いで湯に煙る
 大湯フケの湯 湯瀬村コ
 木の間雲間に ちらつく湖は
 神代ながらの 名も十和田

音楽に関しては、中山晋平の流行歌の音階に基づく、イ音を主音とする「短音階学童旋法」に該当する⁵²。西洋音楽のイ音を主音とする短音階から第四音、第七音を省いた音階である。小田島は新民謡を作曲する際、女性用の長襦袢を飾ってムードをつくってからペンを運んだといわれている。

高杉露星作詞の《花輪小唄》の歌詞は、以下の通り⁵³。「花輪ばやし」や大太鼓が打ち鳴らされる「花

輪ねぶた」, 甚句を踊る「花輪の町踊り」といった祭りが登場する。花輪の良質な水と米, 寒冷な気候によって生まれた地酒(千歳盛)も紹介される。花輪市街地を見下ろす高台に位置する「桜山公園」も歌詞になっている。なお、「花輪ばやし」は2016(平成28)年, ユネスコ無形文化遺産に登録された。

一

花の名どころ お酒のでどこ
鹿角花輪は 唄どころ
サーサ 花輪は唄どころ

二

たてたいさほの 名も桜山
むかし名残の 鐘がなる
サーサ 名残の鐘がなる

三

空のかけ橋 灯にもえさかる
ネムリ流しの いさみ肌
サーサ 流しのいさみ肌

四

ドントたたいた 太鼓の拍手
甚句おどりの あだ姿
サーサ おどりの あだ姿

五

岸は灯の街 新川端に
濡れて見たさを 逢ひに来る
サーサ 見たさを逢ひに来る

六

おどるスキーに 想ひをのせて
雪の西山 たれを待つ
サーサ 西山たれを待つ

音楽に関しては, 小泉文夫の理論に基づく, ニ音を主音とする「二六抜き短音階」に該当する。ニ短調の2番目のホの音と6番目のロの音が使用されていない。

上記とは別の佐藤秀雄作詞の《花輪小唄》もある。歌詞は以下の通り⁵⁴。花輪の春夏秋冬が描かれる。

一

風はそよそよ垣山おろし
はれるさざりに若茶は萌ゆる
昔かはらぬつく館の鐘
ゴンとつきだすナア鐘の音に
春の花輪の夜がふける

二

もゆる焚火をぐるりと巻いて

太鼓叩いて甚句の踊
踊る若衆の語らふ恋に
夏の月さんナア恥かしく
そつとのぞいて知らぬふり

三

赤い頬冠に襟をかけて
アネコ稲刈ると鎌の先に
ふくし曙朝日が躍る
躍る朝日にナア千石の
刈った黄金の稲の花

四

酒をかもする米とぎ唄に
情ふかふかわた雪つもる
宵をふる雪つもるとままよ
紫根のふとんにナア二人居て
こたつでとけた雪見酒

以上, 鹿角市出身の小田島樹人は, 《鹿角小唄》, 《花輪小唄》といった鹿角の新民謡を作曲し, 『秋田県総合郷土研究』にも曲名が紹介された。

おわりに

秋田県女子師範学校における郷土教育は, 1929(昭和4)年11月以降, 本格的に実施され, 1930(昭和5)年の郷土研究施設費交付前に取り組まれていた。1932(昭和7)年に編纂された『郷土研究紀要』では, 音楽科として「秋田県に於ける民謡俚謡に就いて」が掲載されていた。《おばこ節》をはじめとした17曲の伝統的な秋田県民謡が所収されていたものの, 新民謡は所収されていなかった。

1937(昭和12)年, 小田内通敏の指導に基づき, 秋田県師範学校・秋田県女子師範学校により編纂され, 1939(昭和14)年, 『秋田県総合郷土研究』が発行された。「四 郷土芸術」の中に「民謡」も位置づけられ, 秋田県師範学校の音楽の教諭の小野崎晋三によって執筆された。ここでは伝統的な民謡に加え, 50曲の「新作民謡」が掲載されていた。これらは1934(昭和9)年に秋田郷土芸術協会から発行された『秋田郷土芸術』と同一の50曲であった。鹿角市花輪出身の小田島樹人作曲の新民謡が5曲(《大曲小唄》, 《本荘小唄》, 《鹿角小唄》, 《花輪小唄》), 同市出身の黒澤隆朝作曲の新民謡が1曲(《大曲花火音頭》)と秋田県出身の作曲家の新民謡が含まれているという特徴がみられる。《鹿角小唄》, 《花輪小唄》は, 鹿角市の新民謡である。中でも《鹿角小唄》は, 1931(昭和6)年10月, 花輪線開通記念として花輪劇場

で披露された。さらに 1932 (昭和 7) 年 10 月、コロムビアから新橋喜代三 (1903-1963) が唄う S P レコード (27109B) が発売された。

一方、山崎忠郎作詞、中山晋平作曲の 1932 (昭和 7) 年に発表された《湯瀬小唄》は『秋田県総合郷土研究』、『秋田郷土芸術』には所収されていなかった。

『秋田県総合郷土研究』に新民謡が取り上げられた要因には、モデルにした、1936 (昭和 11) 年に発行された『山梨県総合郷土研究』において 40 曲の山梨県の新民謡が紹介されていたからである⁵⁵。

今後は、文部省の指定校であった茨城県についても調査を広げ、師範学校の郷土教育の実態を解明したい。

ところで、『秋田県総合郷土研究』には「舞踊」の中で「大日^{おおひるめら}霊貴^ら神社の舞楽」が掲載されている。鹿角市の八幡平で行われるこの「大日堂舞楽」は、2009 (平成 21) 年、ユネスコ無形文化遺産に登録された。この点についても調査をしていきたい。

付記

本研究は、JSPS 科研費 21K02465 (基盤研究 C「戦前の新民謡運動を契機とした師範学校における郷土教育の展開と戦後への波及」) の助成を受けた。

本稿は、日本音楽教育学会第 54 回大会 (2023 年 10 月、於：弘前大学) における口頭発表の内容を発展させたものである。

¹ 伊藤純郎『増補 郷土教育運動の研究』思文閣出版、2008 年、pp.95-169。

² 同書、pp.361-407。

³ 鈴木慎一郎『山梨県総合郷土研究』における新民謡：『微細郷土研究：加納岩町に関する』を参照して『地域学論集』第 18 巻第 2 号、鳥取大学、2021 年、pp.17-32。

⁴ 鈴木慎一郎「黒沢隆朝による『標準女子音楽教科書』の特徴：『女子音楽教授資料集成』との関係から」『音楽教育実践ジャーナル』vol.9no.2、日本音楽教育学会、2012 年、pp.95-102。

⁵ 鈴木慎一郎「佐藤吉五郎による幼児への和音感教育実践：岡山県女子師範学校で生まれた課題意識から」『白梅学園大学・短期大学紀要』第 48 号、白梅学園大学・短期大学、2012 年、pp.37-51。

⁶ 佐川馨「学校教育創始期の秋田県における音楽教員の系譜」『秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学部門』65、秋田大学、2010 年、pp.27-38。

⁷ 外池智『昭和初期における郷土教育の施策と実践に関する研究：『総合郷土研究』編纂の師範学校を事例として』NSK 出版、2004 年、pp.415-454。

⁸ 板橋孝幸『近代日本郷土教育実践史研究：農村小学校教員による地域社会づくり構想の展開』風間書房、2020 年、pp.231-234。

⁹ 佐川馨「二つの県民歌《秋田県民謡》《県民歌》制定の背景 (1)：郷土教育の隆盛と《秋田県民歌》」『秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学部門』66、秋田大学、2011 年、pp.63-71。

¹⁰ 佐川馨「小田島樹人研究 (II)：『音楽秋田』の論説に見る音楽観、音楽教育観」『山形大学紀要』(教育科学) 第 16 巻第 1 号、山形大学、2014 年、pp.17-28。

佐川馨「小田島樹人の生涯と教育実践」『音楽表現学』Vol.12、日本音楽表現学会、2014 年、pp.27-36。

¹¹ 木暮安水「序」『郷土研究紀要』秋田県女子師範学校、1932 年、p.2。

¹² 渡辺裕『サウンドとメディアの文化資源学：境界線上の音楽』春秋社、2013 年、p.170。

¹³ 秋田大学教育学部創立百周年記念会編『創立百年史 秋田大学教育学部』秋田大学、1973 年、p.243。

中等教科書協会編『中等教育諸学校職員録昭和 5 年 5 月現在 (第 27 版)』中等教科書協会、1930 年、p.807。

中等教科書協会編『中等教育諸学校職員録昭和 6 年 5 月現在 (第 28 版)』中等教科書協会、1931 年、p.827。

¹⁴ 東京音楽学校編『東京音楽学校一覧 従昭和 2 年至昭和 3 年』東京音楽学校、1927 年、p.99。

¹⁵ 中等教科書協会編『中等教育諸学校職員録昭和 7 年 5 月現在 (第 29 版)』中等教科書協会、1932 年、p.865。

¹⁶ 中等教科書協会編『中等教育諸学校職員録昭和 9 年 5 月現在 (第 31 版)』中等教科書協会、1934 年、p.741。

中等教科書協会編『中等教育諸学校職員録昭和 10 年 5 月現在 (第 32 版)』中等教科書協会、1935 年、p.789。

¹⁷ 東京音楽学校編『東京音楽学校・第四臨時教員養成所一覧 昭和 4 年至昭和 5 年』東京音楽学校、1929 年、p.150。

¹⁸ 秋田県師範学校・秋田県女子師範学校編『秋田県総合郷土研究』1939 年、p.1138。

¹⁹ 小野崎晋三「四 郷土芸術」秋田県師範学校・秋田県女子師範学校共編『秋田県総合郷土研究』1939 年、p.952。

²⁰ 秋田県教育委員会・小野崎晋三文化振興顕彰事業実行委員会編『平成元年度文化振興顕彰記念誌 小野崎晋三』1989 年、p.57。

²¹ 中等教科書協会、前掲書、1931 年、p.827。

- 22 中等教科書協会, 前掲書, 1930年, p.807。
- 23 東京音楽学校編『東京音楽学校一覧 自大正13年至大正14年』東京音楽学校, 1924年, p.97。
- 24 東京音楽学校, 前掲書, 1929年, p.150。
- 25 中等教科書協会編『中等教育諸学校職員録昭和3年5月現在(第25版)』中等教科書協会, 1928年, p.699。
中等教科書協会, 前掲書, 1930年, p.807。
- 26 小野崎, 前掲書, p.966。
- 27 同書, pp.961-964。
- 28 同書, p.965。
- 29 相野田瀨平「序」『秋田郷土芸術』秋田郷土芸術協会, 1934年, p.2。
- 30 小玉久蔵「調査を終りて」『秋田郷土芸術』秋田郷土芸術協会, 1934年, pp.291-292。
- 31 秋田郷土芸術協会『秋田郷土芸術』秋田郷土芸術協会, 1934年, p.219。
- 32 東道人『野口雨情 詩と民謡の旅』踏青社, 1995年, pp.402-403。
- 33 中山卯郎編『中山晋平作曲目録・年譜』芸術現代社, 1980年, p.229, p.235。
- 34 湯瀬温泉「湯瀬のうた」(湯瀬ホテルの湯瀬温泉の絵葉書)
- 35 小野崎晋三「四 娯楽」秋田県師範学校・秋田県女子師範学校共編『秋田県総合郷土研究』1939年, p.782。
- 36 鹿角市編『鹿角市史』第三巻(下), 鹿角市, 1993年, p.146。
- 37 鹿角のあゆみ編集委員会編『鹿角のあゆみ』鹿角のあゆみ刊行会, 1969年, pp.222-224。
- 38 工藤利栄『歌の昭和史・鹿角』2015年, p.7。
- 39 同書, p.9。
- 40 『日本民謡集』(1960)によると,《湯瀬村コ》は,「附近の農民が野山に働く時,或はまた家内作業や祝い事のある時必ず歌われるもので,春唄・秋唄の二種あり,歌詞は共通だが節は違い,季節の区分を厳守するという習俗がある」と解説される。
町田嘉章・浅野建二『日本民謡集』岩波書店, 1960年, p.100。
- 41 鹿角のあゆみ, 前掲書, p.224。
- 42 秋田郷土芸術協会, 前掲書, pp.204-205。
- 43 小野崎「四 娯楽」, 前掲書, p.782。
- 44 鹿角市編『鹿角市史』第四巻, 鹿角市, 1996年, pp.764-765。
- 45 鹿角市編『鹿角市史』第三巻下, 鹿角市, 1993年, p.432。
- 46 1925(大正14)年8月,中山晋平は,金沢を経て秋田に旅行をしている。
中山卯郎編『中山晋平作曲目録・年譜』芸術現代社, 1980年, p.321。
- 47 鹿角市, 前掲書, 1993年, p.433。
- 48 井上隆明『小田島樹人 人と音楽』小田島樹人先生顕彰会, 1993年, pp.7-13。
- 49 佐川「小田島樹人の生涯と教育実践」, 前掲書, 2014年, pp.27-36。
- 50 井上, 前掲書, p.14。
- 51 秋田郷土芸術協会, 前掲書, pp.284-285。
- 52 中山晋平「流行歌の作曲」北原鉄雄編『アルス音楽大講座第4巻作曲の実際』アルス, 1936年, pp.178-179。
- 53 秋田郷土芸術協会, 前掲書, pp.285-286。
- 54 同書, pp.289-290。
- 55 鈴木, 前掲書, 2021年。